

# 「謙遜」の儒教倫理的考察

李 致 億

## はじめに

本稿は、「謙遜」という徳目の現代的意味に基づき、儒教倫理における謙遜の位置づけとその意義を考察することを目的とするものである。ここで言う「謙遜」の現代的意味とは、米国の社会心理学者ダリル・ヴァン・トングレンが整理・提示した、「自己を正確に認識すること」、「自己を適切に制御すること」、「他者へ関心を持つこと」<sup>(1)</sup>という三点を基盤とする。もちろん、謙遜は学者によって様々な定義や概念が提示されているが、本稿の目的は謙遜の概念そのものを再定義することではなく、儒教倫理における謙遜の伝統的意義を現代的視座から再解釈し、その位置づけを明らかにすることにある。そのため、学術的定義の比較分析は本稿では試みない。

筆者が上述のような観点から謙遜の儒教的意義を再検討しようとする理由は、大きく分けて二点ある。

第一に、謙遜の一般的意味として挙げられる「自己を誇示せず、他者を尊重する」あるいは「自己を低くし、他者を高める」といった理解では、謙遜の本質が限定的なものとなり、真の倫理的実践を支えるには不十分で、

場合によっては一種の処世術あるいは対人関係技術に堕してしまう恐れがあるためである。とりわけ、このような意味での謙遜は、西洋社会においてのみならず、東洋社会においても否定的に捉えられる傾向がある。

第二に、本稿で中心的に論じようとする「自己を正確に認識する」という理解こそが、儒教倫理における「謙遜」の真の意味に最も適合すると考えられる。後述するが、儒教伝統で取り上げられる謙遜とは、決して処世術や人間関係における技法、あるいは外面的な礼儀作法にとどまらず、徹底的な自己認識を基礎とした道德的態度である。

もつとも、筆者は「自己を低くすること」といった謙遜の一般的理解を否定するのではない。この種の謙遜は日常生活においても広く浸透しており、思想的観点からも依然として強く現れている。これは東洋思想において普遍的に見られる傾向であり、孔子もそのような謙遜の重要性を説いているが、特に老子を代表とする道家思想においては、より一層強調されている。たとえば、「上善は水の如し。水は万物に利して争わず。衆人の惡む所に処る」（『老子』第八章）、「功を成してもそれに居らず」「身を退くを以て善しとす」（第九章）、「天下に先んずるを敢えてせず」（第十二章）等の語句に見られるように、自らを低く置くことの価値は繰り返し強調されている。すなわち、「自己を低くする」という意味での謙遜は、儒家のみならず、東洋思想全般において共有された徳目であると言える。

本研究は、こうした伝統的意味における謙遜と、「自己に対する正確な理解」という現代的意味としての謙遜概念との接点を見出し、その倫理的意義を論じるものである。そのために、古代儒家思想における「謙」「遜」（または孫）「恭」といった用語の語義的分析を行い、次いで孔子の言行における謙遜のあり方を、「好学」の精神との関連において探究する。